ライフヒストリーの図式化の試み（４）

ーー『口述の生活史』における人間類型の分離比較と主観的合理性の定式化ーー

関東学院大学　　渡辺光一

1　目的

ライフヒストリー研究の金字塔『口述の生活史』を UML で定式化し、筆者の意図を発展させる。

2　方法

曖昧かつ（曖昧さをカバーするため）冗長な自然言語で、研究者ごとに異なる文法と意味論に依拠している今日の社会学は、バベルの塔の混沌に似ている。それに対して、共通理解可能な世界標準システム言語 UML (Unified Moldeling Launguge)による定式化は、自然言語の制約無しに人生の意味をより適切に類型化し比較させ、コンピューターによる社会学の前進の基礎となる。

3　結果

第一に、中野が意図した口述と分析の分離を、徹底できる。分析の文法と意味論(シンタクスとセマンティクス)が研究者ごとに異なる現状は、文法と意味論が自然言語により混然一体となっているためであるが、これらを明確に分離する。更に、標準文法に基づいて意味論の中の分類体系と状態遷移とを、クラス図とステートマシン図として、有機的に連携させつつ、明確に分離する。

第二に、中野(1981)の意図した「個性ある生身の個人の研究による新しい人間類型の発見」を可能にする。鶴見（1982）は、『ポーランドの農民』のトマスとズナニエッキの研究では事前に設定された人間類型により具体的な個人のライフヒストリーが分析されているとして、『口述の生活史』はそれと逆である、と評している。情報科学的には、両者はボトムアップとトップダウンの２アプローチとして対比できるが、組織経営や人工知能を含めた人間の知的営みの多くは両アプローチの融合である。UML は、両者を効率的な最適化や探索などで融合させる基礎となる。

第三に、人間類型において記述客体（主人公）と分析主体（研究者）の夫々の類型を分離でき、また人間類型のみならずライフヒストリーの類型化を行うこともできる。更には、客観的事象の類型と事象への解釈の相違の類型（主観的合理性の定性的表現）とを、分離できる。

第四に、ライフヒストリーの構成要素を属性（確率変数）として明確にできるため、情報量の観点から主人公・分析者・読者による事象への意味付与・感興の程度の相違を定式化できる。例えば、知人が死んだ後に窓が揺れたりすると、人はそこに意味を見出し感興を抱く。ユング心理学の言うシンクロニシティやコンステレーションはその典型である。一方で、個々の事象の平均情報量も相互情報量も同程度でも、ラーメン屋でネギが切れていた後でスニーカーの靴紐が緩んでも、人は特に意味を見出さない。つまり、文化規範や認知バイアス等による主観的合理性の定量的表現が、確率（情報量）の相違や変換として可能となり、各種マイニングで検出もできる。

第五に、論理学や言語ゲーム論や有限オートマトンなどの関連研究との接点を明確にできる。

4　結論

今日のコンピューターは、学生の体験談を判読して採否を決めたり、小説を作成するなど、人間的な作業をできる。本研究により、将来的にはライフヒストリーの解析への応用も期待できる。

文献

中野卓，1977/1995，『口述の生活史―或る女の愛と呪いの日本近代(ライフ・ヒストリー)』,御茶の水書房.

中野卓，1981,「個人の社会学的調査研究について(1)」,社会学評論 Vol.32(1),P2-12

鶴見和子,1982,「<書評>中野卓編著「口述の生活史:或る女の愛と呪いの日本近代」」,社会学評論 32(4),P73-75